

“越境”する文化

— 対馬海峡島嶼部における 縄文晩期から弥生時代にかけての様相 —

俵 寛 司

サイバー大学世界遺産学部・客員教授

要 旨

本研究では、長崎県対馬市北西部に位置する峰町三根地区の遺跡資料をもとに、対馬海峡島嶼部、すなわち朝鮮半島と日本列島の「境界」における縄文時代から弥生時代にかけての考古学的様相について考察する。三根地区の三根遺跡では、遺跡形成の最も古い段階より朝鮮半島系土器（無文土器：松菊里式）が含まれ、また、同遺跡に隣接する井手遺跡でも、最下層で縄文晩期の日本列島系土器（山の寺・夜臼式）と朝鮮半島系土器（無文土器：先松菊里段階）が共伴し出土している。両遺跡において日本列島系と朝鮮半島・大陸系の異系統の土器が共伴する状況は、続く弥生時代以降も継続して見られる傾向である。こうした考古学的文化の様相は、縄文時代から弥生文化成立時期にかけての対馬における生活文化様式の一部を示すとともに、対馬海峡を通じた社会的「交流」の実態をも示唆している。

キーワード：縄文・弥生時代、対馬、朝鮮半島、土器、集落遺跡

第1章 はじめに

対馬は、朝鮮半島と日本列島の間位置し、南北約 82 km、東西約 18 km と、沖縄本島を除き日本では三番目の大きさの島とされる（図 1・2）。この島は、対馬海峡西水道を挟んで韓国南部までの最短距離が 49.5 km と至近であることから、先史・古代より日本列島とアジア大陸との交渉の窓口となった。また中世以降も、元寇後の倭寇の活動や対馬藩宗氏の日朝外交等^①、異なる世界の間での「交流」（時に紛争を含む）において常に重要な役割を果たしてきた。しかし近代以降の対馬は、対馬海峡に浮かぶ一大要塞として閉鎖的な社会状況が続いたため、考古学の研究対象として門戸が開かれたのは第二次世界大戦終結後のことである。

戦後日本の考古学では、静岡県登呂遺跡の発掘を契機として日本考古学協会が 1948 年に発足し、特に縄文時代から弥生時代にかけての様相については、同協会西北九州総合調

原稿受付日：2008 年 12 月 2 日

原稿受理日：2009 年 2 月 13 日

査特別委員会の活動等により九州をフィールドに本格化した（日本考古学協会編 1949, 1954, 1960, 1961）。対馬でも 1948 年早くも東亜考古学会による考古学的調査が全島で実施され、その後も九学会連合（日本考古学会）による総合調査（1950・1951 年）が対馬・壱岐で実施される等、アジア大陸・朝鮮半島との地理的な空間を繋ぐ位置にある対馬海峡島嶼部（対馬・壱岐）への学術的関心は高かったといえる（日本人文科学会編 1951；東亜考古学会 1953；九学会連合対馬共同調査会編 1954）。

しかしながら、日本が高度経済成長を迎え、緊急発掘調査件数の増加によって本土側では膨大な考古学（埋蔵文化財）資料が蓄積し、様々な分野の研究が進展していったのに対し、辺地・離島である対馬においては、島外からの学術調査以外にまとまった発掘調査の機会も少なかったことから、資料・データの不足や研究の遅れがあったことは否めない。実際、1990 年代終わり頃まで、対馬で発見・調査された弥生～古墳時代の遺跡の多くは、岬や丘陵の突端付近に位置し、比較的発見の容易な埋葬遺跡（石棺等）であり、貝塚遺跡等を含め居住関連と推定される遺跡の調査も複数回行われてはいるが、遺構の検出には結びつかなかった。

以上のような状況の中、1999 年から峰町教育委員会／峰町歴史民俗資料館により実施された峰町三根遺跡（山辺区）の調査において、縄文晩期～弥生・古墳時代併行期のまとまった集落遺跡（居住関連遺構群）の存在が初めて確認され⁽²⁾、筆者も一連の調査に研究協力者として携わった経緯がある。日本考古学においてこれまで蓄積された研究成果を検証し、先史・古代日本列島における様々な文化受容やその社会背景等についてさらに研究を進めるためには、「境界」に位置する対馬の集落遺跡の調査・研究は必須である。本研究は、それら近年明らかとなった諸遺跡の概要（峰町教育委員会 2002, 2003）に基づき行った研究成果の一部である。



図 1 対馬の位置

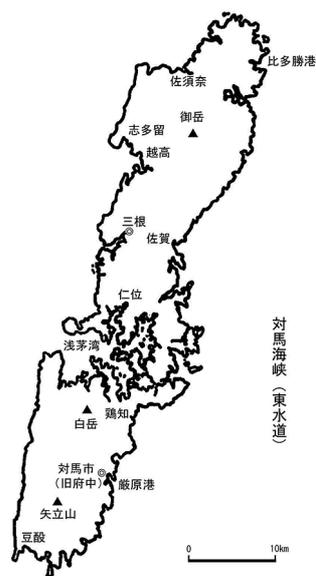


図 2 対馬の地名

第2章 研究の目的と方法

本研究の大きな目的は、前章で述べた問題を踏まえ、対馬の先史・古代の集落遺跡に関する情報を提示し、併せてその時間的・空間的位置づけについて初歩的な分析・考察を行うことで、当該時期における対馬の考古学的研究の現状を明らかにすることである。そして、その結果から従来の考古学的説明・解釈について何が言えるのか可能性を探りたい。

研究の方法・手順として、次の第3章で分析を行う。第1節で対象資料（遺跡資料）についての公表データを整理・検討する。第2節で対馬における縄文晩期（中葉）～弥生時代併行期の土器編年、特に縄文晩期から弥生時代の移行期について検討し、日本列島（北部九州）、朝鮮半島南部及び北部との考古学的な併行関係を明らかにする。第3節では、前節で設定された時間軸をもとに、三根地区と近隣の吉田地区を含めた遺跡分布について空間的な分析を行う。そして第4章では、前章の分析結果について考察し、対馬海峡島嶼部・対馬における集落形態、出土土器、鉄器生産の問題等について、関連する研究も参照しながら検討する。

本研究の対象資料（具体的な考古学的資料）としては、対馬島北西部に位置する峰町三根湾周辺（三根地区・吉田地区）の遺跡群、特に三根地区に所在する三根遺跡及び井手遺跡に関する調査資料を中心に扱う。三根遺跡は、上述のように縄文晩期～弥生・古墳時代併行期を主とする集落遺跡であり（図3：A）、一方の井手遺跡は三根遺跡に隣接する比較的低地の遺跡で、同じく縄文晩期に始まる居住関連の遺跡である（図3：B）。また、その他資料や関連する研究等については、本文中で適宜取り上げることとする。

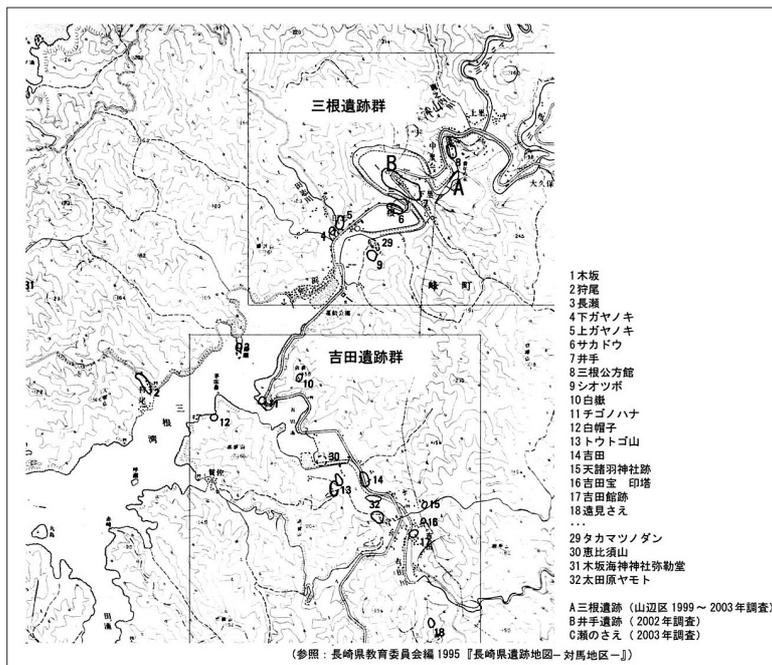


図3 三根湾周辺の遺跡（長崎県教育委員会 1995 から作成）

第3章 分析

第1節 対象資料（遺跡資料）の検討

(1) 三根遺跡

三根川上流左岸に西に開口した馬蹄形（ばていぎょう）の山壁が民家と耕作地を囲んだ狭い谷がある（図3参照）。一帯の小字名は山辺（「ヤンベ」）と称し、ここが三根遺跡山辺区（別名山辺遺跡，以下「三根遺跡」と略す）である（図4・写真1）。

こうした谷状の地形は、対馬独特のリアス式に入り組んだ海岸線や狭い入江等が陸化したものと考えられ、対馬方言では「サエ」と称している。三根遺跡はそのサエのやや奥、東の山裾から西に伸びた舌状の丘陵部周辺に位置している。丘陵は長さ約160m、幅約60m、丘陵根方の標高約25m、先端部約8mで三根川の旧河道に至る。現在の地形はサエの堆積作用によって形成されたものである。対馬の山々は往々にして急峻かつ脆弱な地盤のため、降水時には周囲の山からサエを通じて河道へと大量の土砂等が運ばれ、周囲を削り分厚く堆積する。

現在、丘陵北側は「コデン」（古田）と呼ばれる深田、南側には畑地として土地利用がなされている。丘陵前方には水を祭る「ハチリュウデン」（八龍殿）の小さな祠がある。古環境を復元すると、かつてこの一帯は、河口と海に連なる水際の数少ない居住適地であったと考えられ、このことは三根遺跡の規模と性格を考える上で重要な要素である。



写真1 三根遺跡山辺区



図4 三根遺跡山辺区調査区

（峰町教育委員会 2003：2頁図から引用・作成）

三根遺跡調査の発端は、1995年畑地での土器採集に遡り、これを手掛かりとして同年小規模の試掘確認が行われたことによる。その後、峰町教育委員会（峰町歴史民俗資料館）は「峰町の自然と文化を守る会」の委託を受け、1999年11月から2000年3月までの期間、丘陵南側の畑地及び同丘陵裾部での試掘調査を行い、丘陵一帯の遺構の存否確認を行い、出土遺物に朝鮮半島系遺物が多数含まれている事実等が明らかになった。この成果を受けて同委員会は、2000年5月から2001年3月までの期間、丘陵中央部を対象に本格的な発掘調査を実施し、その結果、多数の居住関連遺構（竪穴状遺構・柱穴群等）の検出に成功した。この発見は『魏志倭人伝』記載の「対馬国」の拠点集落の発見として注目され、翌2002年7月には、三根遺跡と井手遺跡（後述）を対象として戦後国内最初となる日韓共同学術調査（「峰町日韓共同遺跡発掘交流事業」）が韓国東亜大学校と共同で実施されている。その後も三根遺跡とその周辺における調査は継続して行われたが、2004年2月の対馬市六町合併により峰町としての調査活動は終了している。

以下、1999年～2002年の調査概要について説明する。

調査区は地形によって大きく4か所に分かれている。すなわち、丘陵南側の低地及び同裾部（1～3区）、丘陵中央部の比較的高い位置（4～5区）、丘陵中央部の比較的低い位置（6・7区）、そして丘陵北西裾の低地（8区）である。それぞれの調査内容をまとめると以下のようである。

1～3区：「サエ」の堆積作用を受け、明確な遺構は検出されていない。出土遺物には、弥生～古墳時代併行の土器・鉄器が数多く含まれ、堆積中より中世・近世の遺物（陶磁器類）も出土している。

4～5区：畑地等の造成により遺構の残りが悪く、時期不明の石組溝（暗渠）が検出されている。比較的高所では、弥生～古墳時代併行の土器や鉄器／鉄器関連遺物も見つかっている（4区では2002年に日韓共同調査が行われている）。

6～7区：弥生～古墳時代併行期とみられる居住関連の遺構群が検出されている。主な遺構の種類・数量は、竪穴状遺構6基、不明遺構4基、土坑6基、溝状遺構2基、掘立柱建物1棟分を含む多数の柱穴群から構成されている（図5）。各遺構周辺からは、縄文晩期～古墳時代併行期を中心とする各種土器や石器、鉄器／鉄器関連遺物等が出土している。

8区：発掘調査により丘陵裾部の旧地形が明らかとなり、その急斜面に積層する拳大の角礫の隙間から弥生～古墳時代併行期の遺物が出土している。斜面下の低地には古墳時代併行期とみられる鍛造鍛冶炉の遺構が数基検出されている。

以上の各区からは縄文晩期～古墳時代併行期の各種土器や鉄器、鉄器関連遺物、ガラス玉、石器等が多量に出土しており、特に縄文晩期～弥生時代併行期の遺物は、6～7区の居住関連遺構群及びその北側から丘陵裾部にかけて伸びる「大溝状遺構」（SD 03）周辺から数多く出土している（峰町教育委員会 2002, 2003）。出土土器には日本列島系土器だけではなく朝鮮半島系土器（南部及び北部）が少なからず含まれており、土器胎土によってA類（砂質系土器）・B類（瓦質系土器）・C類（陶質系土器）の区分を設定すると、酸化焼成のA類土器が出土土器の大半を占め、次いで還元焰焼成のB類・C類土器が加

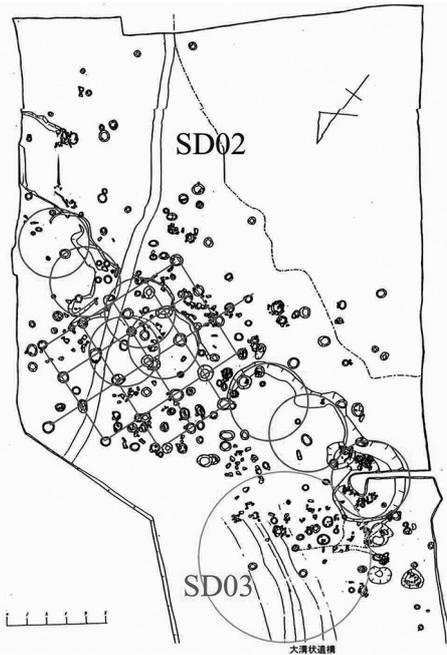


図5 三根遺跡山辺区6~7区平面図
(峰町教育委員会 2003: 2 頁図から引用・作成)

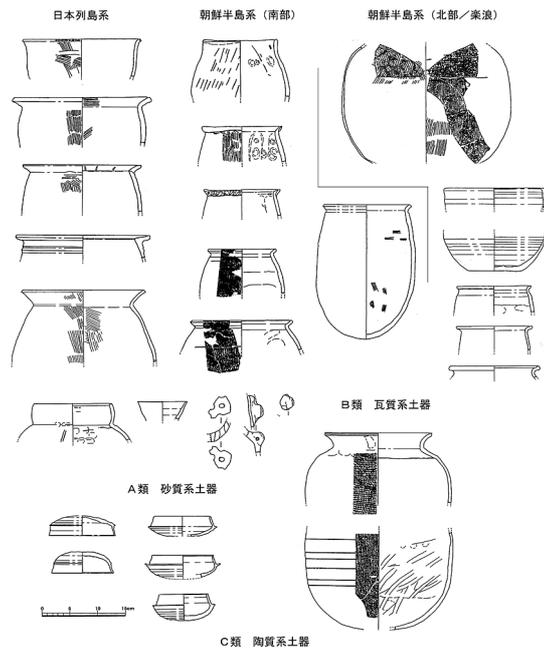


図6 三根遺跡山辺区出土土器
(峰町教育委員会 2002 所収図から引用・作成)

わり、各時期・各系統の土器組成を構成している（図6）。

以上について検討を加えると、三根遺跡の主な帰属時期を縄文晩期～弥生・古墳時代併行期に置くことには問題はなく、とりわけ6~7区については、遺構の密度や出土遺物の年代からみて、長期にわたる「居住」もしくは生活空間の場として利用されていたことは明らかである。少なくとも遺構群の一部は古墳時代併行期以降も継続する可能性があり、丘陵の等高線に沿って重複しながら並んでいる竪穴状遺構群（住居址）や柱穴群（掘立柱建物数棟を含む）、溝状遺構（SD02・SD03）等が時間的にどのような併行関係にあるのか、さらに検討の必要性があるだろう。詳細は正式報告を待ちたい。

(2) 井手遺跡

井手遺跡は、三根遺跡とも比較的近く、三根川が上流で大きく屈曲する所（中里）に広がる水田と東側の山裾の間に位置する（図3参照）。

遺跡発見の契機は、1955年頃、水田の灌漑用の井戸を掘削している際掘り上げた土砂に弥生土器が多く含まれることが注意されたことによる。その後1959年夏に阿比留嘉博・永留久恵両氏により試掘調査が行われ、弥生前期の板付I式・II式土器や挟入片刃石斧、炭化した植物質等が出土している（九州大学文学部考古学研究室1974）。

1990年、峰町教育委員会と愛媛大学下條信行氏により、井手遺跡における考古学的な土器・層位の把握と初期農耕文化の解明を目的とした学術調査が実施された（峰町教育委員会1990）。概要によると、国道を挟む2地点の調査の結果、本来舌状の丘陵地であったと思われる先端部分から多量の土器が出土し、土層は11層からなり、9・11層は川の氾濫

等により無含層である。最下層は2.3 mに達する。ことに7・8層は、弥生前期の板付Ⅰ式とⅡ式、及び朝鮮系無文土器前期の孔列文土器、小形の丹塗磨研土器が出土し、両者の時代的併行関係を押さえる重要な層となったという（峰町教育委員会1993）。

2002年7月、「峰町日韓共同遺跡発掘交流事業」の調査対象として井手遺跡が三根遺跡と共に選ばれ、峰町教育委員会と韓国東亜大学校による発掘調査が実施されている（峰町教育委員会2003）。以下、その概要について説明する（峰町教育委員会2003）。

2002年調査区は1990年調査区（1990AT）に隣接する民家の敷地内に設定されている（図7）。層位は9層からなり、縄文晩期から中世（一部近世も含む）にかけての各種遺物が出土している（図8・9）。各層出土の土器の種類について段階的に整理すると以下の通りである（表1）（型式名・時期等については後述）。

- 第1段階（6-8層）：突帯文（縄文土器）+先松菊里段階（無文土器）（図9：1～7・10）
- 第2段階（6-7層）：板付式（弥生土器）+円形粘土帯土器（無文土器）（図9：11）
- 第3段階（5-6層）：須玖式（弥生土器）+三角粘土帯土器（無文土器）+瓦質系土器
- 第4段階（5-7層）：古墳時代土師器+三国時代陶質土器
- 第5段階（1-4層）：中世陶磁器（中国陶磁+朝鮮陶磁+国産陶磁+砂質系土器）

以上について検討を加えると、井手遺跡（2002年調査区）では、居住・生活空間として近世までに少なくとも5段階以上の土地利用がなされていることがわかる。特に第1～3段階では、前後して複数の遺構が存在した可能性があり、弥生時代開始期における日本列島系土器と朝鮮半島系土器との共存関係を検証する上でも貴重な資料である。7層

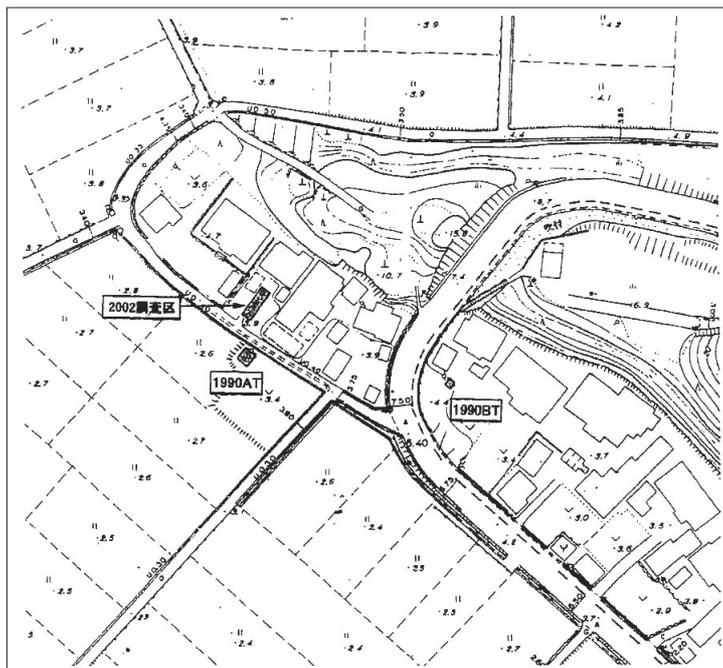


図7 井出遺跡調査区（峰町教育委員会2003：3頁図）

“越境”する文化

層位	滑石混入土器	無文土器／先松菊里段階	突帯文土器	板付式土器	無文土器／凹形粘土帯段階	無文土器／三角粘土帯段階	無文土器	須玖式以前（須玖式土器）	瓦質系泥質土器	古墳／三国砂質系土器	三国瓦質（陶質系土器）	不明砂質系土器	中世陶磁器	中世砂質系土器	土器様相	その他の遺物
1～4層 (攪乱層・中世遺構含む)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	少量	少量	少量	多量	少量	中世Ⅰ～Ⅱ	高麗～朝鮮陶磁・中国陶磁・肥前・釜山／対州窯ほか
5層：灰褐色土				3		1	1	2		15	11				古墳Ⅰb～古墳Ⅰ／	黒曜石剥片 2
6層：茶褐色土			2	26	4		8	4	2	10	7	43			対馬Ⅰa～古墳Ⅰ／Ⅱ	打製石斧 大陸系磨製石器(剣・鎌・柱状斧)5 石材 1 イノシシ歯牙 鉄斧 1
7層：黒色粘質土 (古墳時代遺構含む)			5	17	1				1	3	1	17			対馬Ⅰa～古墳Ⅰ／	石製管玉 3 石器 1 動物骨 2 骨鎌 1
溝状遺構 (7層と同様)			1	1											対馬Ⅰa～Ⅰb	大陸系陶製石器 1 (柱状斧) 敲石
8層：褐色土	1	2	4									5			対馬Ⅰa	黒曜石剥片 4
9層：礫層 (無遺物層)																

表 1 井手遺跡 2002 年調査区各層出土遺物 (峰町教育委員会 2003: 3 頁表から引用・作成)

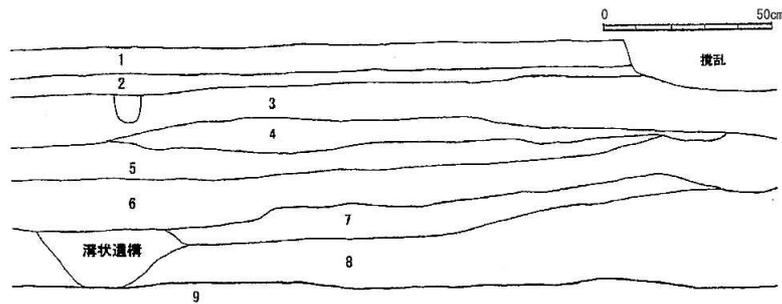


図 8 井手遺跡 2002 年調査区土層図 (峰町教育委員会 2003: 3 頁図)

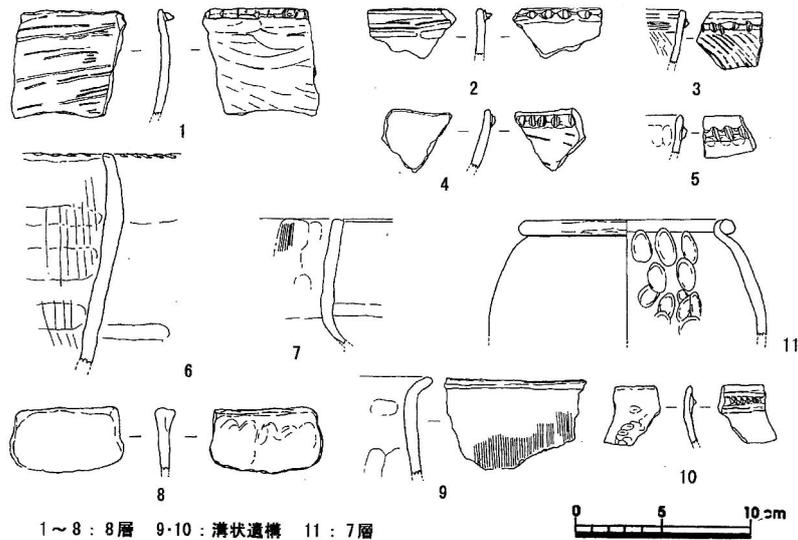


図 9 井手遺跡 2002 年調査区出土土器 (峰町教育委員会 2003: 4 頁図)



写真2 井手遺跡溝状遺構（峰町教育委員会 2002：表紙写真）

では「溝状遺構」も検出されているが（写真2），住居址の一部である可能性が高い。この他，8層からは，他と様相の異なる滑石混入胎土の土器（図9：8）も出土しており，縄文後期土器あるいは朝鮮半島系の土器に対比される。7・8層は1990年調査区7・8層に相当すると考えられ，下層に1990年調査区「10層」に相当する層が存在する可能性もある。詳細は今後の調査を待ちたい。

第2節 土器の編年と併行関係

はじめに対馬における当該時期の土器編年（時期区分）について，縄文晩期～弥生時代併行期をⅠ～Ⅴ期，古墳時代併行期を古墳（K）Ⅰ～Ⅳ期に区分し，周辺地域（日本列島・朝鮮半島・中国大陸）との併行関係と合わせて提示しておきたい（表2）。なお，各時期の実年代については以下のように捉えておく⁽⁵⁾。

【弥生時代併行期】

- Ⅰ期 縄文晩期（弥生早期）～弥生時代前期：前1千年紀
- Ⅱ期 弥生時代中期中頭～中期後葉：前3世紀～前1世紀前半
- Ⅲ期 弥生時代中期末葉～後期中頭：前1世紀後半～後1世紀中葉
- Ⅳ期 弥生時代後期前葉～後期後葉：後1世紀後葉～後2世紀前葉
- Ⅴ期 弥生時代終末期～古墳時代中頭：後2世紀後葉～後3世紀中葉

【古墳時代併行期】

- KⅠ期 古墳時代前期：後3世紀後葉～後4世紀後葉
- KⅡ期 古墳時代中期：後4世紀末～後5世紀代後葉
- KⅢ期 古墳時代後期：（後5世紀末～）後6世紀代
- KⅣ期 古墳時代終末期：後7世紀代

“越境”する文化

表2 編年対照表

中国大陸	朝鮮半島 北部地方	朝鮮半島 南部地方	対馬島	日本列島 北部九州	時期区分	対馬の埋葬遺跡 対馬島北部 (対馬中・南部)	
春秋戦国	古朝鮮時代	無文前期 (欣岩里式)	I a	山寺・夜臼 ～板付 I	I 期 縄文晩期中葉 ～弥生前期	泉	
前漢 (前漢前～中期)		無文中期 (先松菊里段階) (松菊里式)					I b
		無文後期前半	II a	城ノ越 須玖 I (古)			II 期 弥生中期初頭 ～中期後葉
		無文後期後半		II b			
(前漢後期)	前108年 漢・朝鮮四郡設置	原三国時代	II c	須玖 II (新)	III 期 弥生中期末～ 後期初頭	三根ガヤノキ 吉田恵比須山 佐賀小姓島	
新	(楽浪郡ほか)	前期 (茶戸里段階)	III	高三瀧 (古)			
後漢 (後漢前・中期)	遼東公孫氏	中期 (良洞里段階)	IV a	高三瀧 (新)	IV 期 弥生後期前葉 ～後葉	経ノ隈遺跡 塔ノ首遺跡 木坂ヨケジ 志多賀櫛ノサエ 三根ガヤノキ	
(後漢後期)		後220三国分裂	後期 (下堡・老圃洞段階)	IV b			下大隈
				V a			
後280西晋統一		後313楽浪郡滅亡	三国時代	V b	西新	V 期 弥生終末～ 古墳初頭	木坂ヨケジ 三根ガヤノキ 志多賀櫛ノ浦 佐護クビル (仁位ハロウ) 志多留大將軍山
後316～ 五胡十六国分裂	高句麗	百濟・新羅・ 伽倻諸国	古墳 I				
後436～ 南北朝対立	後668高句麗滅亡	後562伽倻滅亡	古墳 II	須恵器	古墳中期	三根ガヤノキ 吉田恵比須山 トウトゴ山 チゴノハナ	
隋統一 唐			統一新羅	古墳 III	須恵器	古墳後期	三根ガヤノキ (高浜根曾)
五代十国分裂	高麗	高麗	古墳 IV	須恵器	古墳終末期	吉田恵比須山 (佐須矢立山)	
宋～元 明～清	朝鮮	朝鮮	古代	奈良～平安	古代		
			中世	鎌倉～南北朝 室町～江戸初	中世	木坂海神社 佐賀宗家館址	

上記編年は、対馬海峡島嶼部だけではなく、日本列島・朝鮮半島の編年体系の枠組みを繋げる役割を持つ、いわば「境界編年」ともいえる。特に弥生時代併行期に関しては、あくまでも対馬島内の、主に埋葬遺跡（遺構）の副葬土器のセット関係に基づき設定したものである（図10）。しかし、特にI期については、埋葬遺構のデータ等が不足しているため、他の遺跡資料による検証が必要である。以下この部分に焦点を当て、井出遺跡及び三根遺跡の資料から検討を加えておきたい。

縄文時代から弥生時代にかけての移行期についてはこれまでも様々な研究がなされているが、紙面の制限もあり、ここでは特に九州地方の土器である「夜臼式」と「板付式」について説明のみ行う。夜臼式は北部九州を中心とする縄文時代晩期（中葉～後葉）の土器

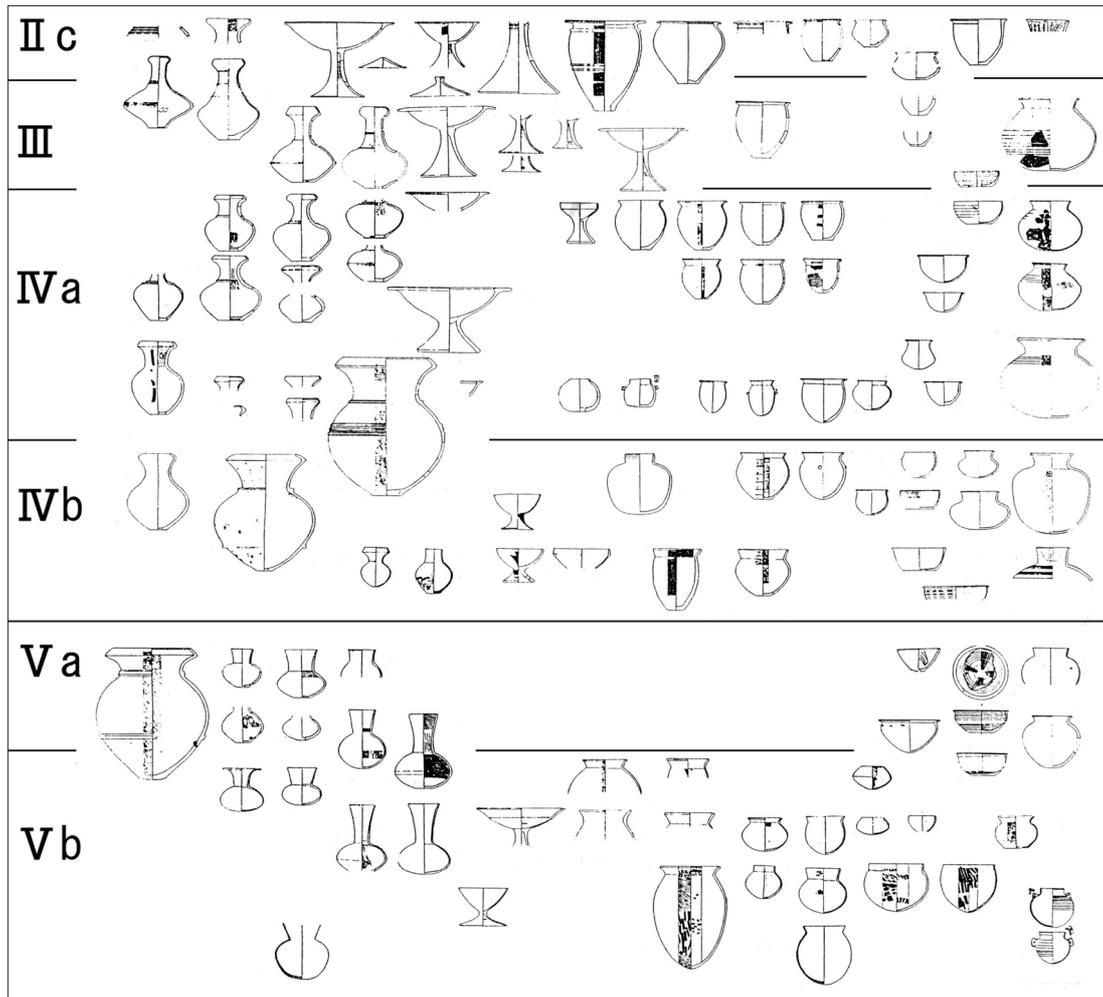


図10 対馬における埋葬遺跡出土土器の編年（Ⅲ～Ⅴ期）

縄文土器		彌生土器									古式土師器	
晩期	前期	前期			中期			後期				
黒川式	山ノ寺式	夜臼式	板付Ⅰ式	板付Ⅱ式			城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三彌式	下大隈式	西新式
				a	b	c						
欣岩里式		松菊里式		水石里式		勸鳥式		(前半)		(後半)		
前期		中期		後期			前期		後期		三國土器	
無文土器							三韓土器					

図11 弥生土器と朝鮮半島系土器との併行関係（武末 1987）

型式であり、板付式は同じく弥生時代前期の土器型式である。

かつて弥生文化は板付式（あるいは遠賀川式）土器の成立をもって考えられたが、1950年福岡市板付遺跡の調査により夜臼式土器と板付式土器との共伴事例が確認され、「夜臼式」「板付Ⅰ式」「板付Ⅱ式」の土器型式が設定された。すなわち夜臼式・板付Ⅰ式の共伴時期をもって弥生文化の開始と位置付けられたのである（森・岡崎 1961）。その成果から、夜臼式土器に先行する「刻目突帯文土器」（突帯文土器）への関心も高まり、長崎県山の寺遺跡の資料から「山の寺式」（縄文晩期中葉）が設定されたが⁶⁾、その後、夜臼Ⅰ式→夜臼Ⅱa式→夜臼Ⅱb+板付Ⅰ式という編年序列が示されたことから、山の寺式はあくまでも島原半島における夜臼Ⅰ式・夜臼Ⅱa式の地域的変異として整理されるに至った（山崎 1980）。ただし、佐賀県菜畑遺跡や福岡県曲り田遺跡の調査では、従来の山の寺式土器の存在が確認される等、山の寺式の評価をめぐっては意見が分かれる（田中 1986）。本稿では、山の寺式を「夜臼Ⅰ式・夜臼Ⅱa式」に相当するものとし、便宜上「山の寺・夜臼式」と呼称しておく。

朝鮮半島（南部）における時期区分についても補足しておく。全体として（新石器時代→）無文土器時代（青銅器時代～初期鉄器時代）→原三国時代（三韓時代）→三国時代という区分が用いられているが、無文土器時代の土器編年については、指標となる土器型式から前期を「欣岩里式」、中期を「松菊里式」、後期前半を「水石里式」、後期後半を「勸島式」と呼称することが多い（武末 1987）（図 11）。ただし現在、無文土器の編年においては、狭義の「松菊里式」は必ずしもこの段階の典型ではなく（家根 1997 ほか参照）、「松菊里式」に先行する段階について、本稿では「先松菊里段階」と呼称しておく。

無文土器時代後期～原三国時代の土器編年については、埋葬遺跡の資料をもとに朝鮮半島南部の編年及び朝鮮半島北部との併行関係が明らかにされ（高久 2000）、これと弥生土器編年との併行関係も検討されている（白井 2001）。

以上ふれた点等を考慮しながら本稿では、無文土器時代を「無文前期（欣岩里式）」「無文中期（先松菊里段階・松菊里式）」「無文後期前半（円形粘土帯土器）」「無文後期後半（三角形粘土帯土器）」とし、原三国時代については「原三国前期（茶戸里遺跡段階）」「原三国中期（良洞里遺跡段階）」「原三国後期（下埜遺跡・老圃洞遺跡段階）」と呼称する。

さて、前節では井手遺跡各層の出土土器を段階的に整理したが、第1段階～第3段階を上述の型式名称・時期比定に従い整理すると以下のようなものである。

- 第1段階（6-8層）：縄文晩期中葉～後葉（突帯文土器＝山の寺・夜臼式土器）＋無文中期前半（先松菊里段階無文土器）（＋滑石混入土器）
- 第2段階（6-7層）：弥生前期（板付Ⅱ式土器）＋無文後期前半（円形粘土帯土器）
- 第3段階（5-6層）：弥生中期（須玖式土器）＋無文後期後半（三角粘土帯土器）＋瓦質土器（原三国前期か）

補足すると、井手遺跡第1段階からは山の寺・夜臼式の典型的な突帯文甕だけでなく、

同系統もしくは先松菊里段階に関連する壺・甕等も含まれる（図9：6・9）。また、三根遺跡では、無文中期後半の松菊里式土器が6～7区大溝状遺構（SD 03）から出土している（図6：中央列最上段）。井手遺跡の第1段階と第2段階の中間を埋める資料と考えられる。

以上の検討から、I期の編年序列はほぼ検証され、日本列島、朝鮮半島の土器編年との併行関係にも大きな矛盾はないと考える。なお、井手遺跡・三根遺跡に関する検討を踏まえ、I期をIa段階（山の寺・夜臼式～板付I式併行）とIb段階（板付II式併行）に区分しておきたい。

第3節 集落・埋葬遺跡の形成

三根地区の集落・埋葬遺跡（三根遺跡群）の空間的配置と時間的変化についての傾向を掴むため、隣接する吉田地区の遺跡（吉田遺跡群）と合わせた三根湾一帯の遺跡分布を検討する。すべての遺跡・遺構について細かな時期区分が適用できるわけではないが、できるだけ多くの遺跡資料を含めるため、I～V期（縄文晩期～弥生時代併行期）とKI～KIV（古墳時代併行期）とに大別し、さらに前者については、埋葬遺跡資料が少ないI・II期（縄文晩期～弥生時代中期併行）と埋葬遺跡が顕著なIII～IV期（弥生時代中期末～終末期併行）に区分し、最終的に3段階にまとめた。以下各段階について説明する。

① I～II期（縄文晩期～弥生中期併行：図12）

三根川流域・三根地区では、三根遺跡及び井手遺跡で居住活動が開始している。吉田川流域・吉田地区では、居住遺跡として吉田貝塚が縄文時代後期より継続して営まれている。この時期の埋葬遺跡の発見例は非常に少なく、吉田地区・太田原丘遺跡での存在が断片的に確認されているのみである。

② III～V期（弥生中期末～終末期併行：図13）

三根地区では、三根遺跡・井手遺跡での居住が継続し営まれている。それら集落立地から三根川下流（旧地形では三根湾）に面した位置に埋葬遺跡が営まれる。この時期における埋葬遺跡の増加は、対馬島内各地で顕著であるが、特に三根地区は対馬最大の厚葬墓地の集中地帯であり、上・下ガヤノキ遺跡、タカマツノダン、サカドウといった朝鮮・大陸系青銅器を副葬する厚葬墓地が顕著にみられる。一方、吉田地区でも厚葬墓を含む埋葬遺跡が出現し、トウトゴ山、恵比寿山、チゴノハナ遺跡等が代表的である。また、これらに対応する居住遺跡として新たに大田原ヤマト遺跡やセノサエ遺跡の形成が開始している。

③ KI期～KIV期（古墳時代併行：図14）

KI期（古墳前期）に対馬南部では「畿内形古墳」の造営が開始する。三根地区・吉田地区では当該時期の埋葬遺跡は発見されていないものの、井手遺跡・三根遺跡における居住活動はむしろ継続しており、今後注意が必要であろう。KII期（古墳中期）以降に再び



図12 ①Ⅰ～Ⅱ期の遺跡分布(縄文晩期～弥生中期併行)



図13 ②Ⅲ～Ⅴ期の遺跡分布(弥生時代中期末～終末期併行)

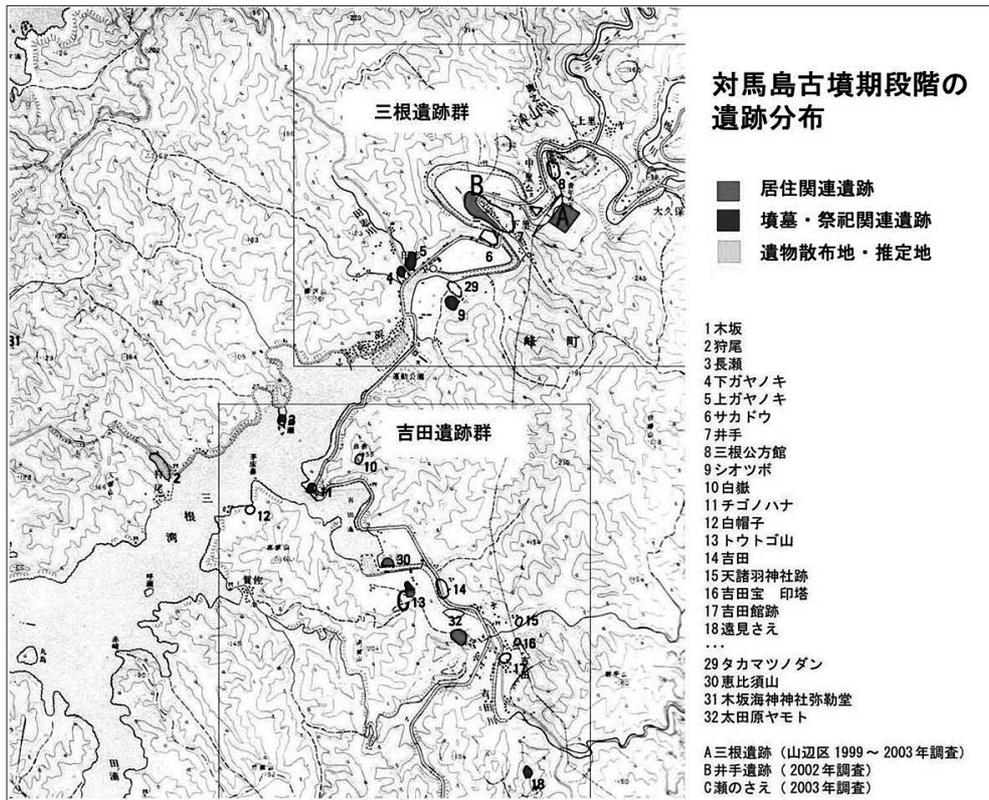


図14 ③KI～KIV期の遺跡分布 (古墳時代併行)

埋葬遺跡が増加し、三根地区では上・下ガヤノキ遺跡やシオツボ遺跡、吉田地区ではトウトゴ山、恵比寿山、チゴノハナ古墳等が築かれている。

第4章 考察

(1) 集落

先史時代（縄文時代）に遡れば、対馬ではすでに大陸方面との繋がりを示す考古資料が数多く見つかった。とりわけ対馬に典型的な漁撈文化については、骨角製の単式釣針のほか、大型魚・海獣の捕獲に必要な結合式釣針や離頭銚（石銚・石鋸）等が縄文後期の遺跡等から出土している。これらはロシア沿海州・韓国東南部・九州西北部一帯の先史漁撈文化とも共通する要素である。また、延縄漁法に使用されたであろう逆T字型釣針の存在は、渤海湾地域・黄海の漁撈文化との繋がりを示し、従来の畑作栽培に加えて同地方からのイネ栽培の波及をも暗示させるという（甲元 2001）。

佐賀貝塚では、九州・伊万里腰岳産の黒曜石製の石器や、北日本海に生息するサルアワビ・ユキノカサ貝製の貝輪、中国東北部・朝鮮半島に生息するキバノロの歯牙製ペンダント、南海産と推測されるホシキヌタ貝製のペンダント等が出土しており、日本海・東シナ海における広範囲の交易／交換活動もあったことが明らかとなっている（峰町教育委員会 1996）。

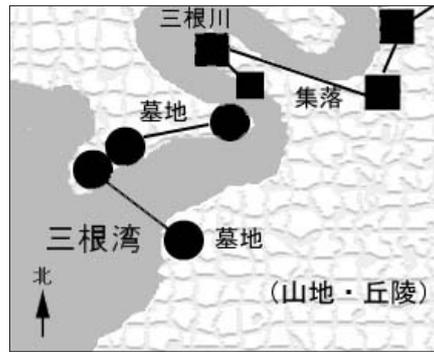


図 15 三根地区における集落・墓地モデル

以上のような事実は、先史時代の対馬ではすでに、多様な環境に適応した資源の獲得方法・知識が存在し、さらに大陸方面や日本海沿岸諸地域との広範な社会的ネットワークが存在したことを暗示させる。そして、縄文文化社会から弥生文化社会への移行において、一定の農耕適地の存在を条件とする大陸系水稲稲作文化の受容や「弥生型農耕社会」の発展といった社会進化モデルとは違った形での社会進化の在り方をも連想させる。

対馬における縄文晩期から弥生時代にかけての様相として、前章で述べた集落遺跡の分析等から具体的な社会像を復元するためには、まずは対馬の独特な地理的・環境条件を考慮しなければならない。そもそも対馬では、大陸平原や日本でみられる小平野単位の集落形態は存在不可能であり、海岸部や河川流域にわずかに存在する狭い低丘陵や矮小な扇状地に小集落が営まれる形態が現在まで対馬の一般的なムラの姿であった。しかしこのことは個々の小集落（ムラ）が内外の広範な社会的ネットワークの存在から独立していたことを示すものではない。すなわち、対馬の集落（部落）の形態は、河岸や河川に連なる小集落が結びついた複合体として解釈されるのである（図 15）。以下ではこうした集落の出土土器の性格や存立基盤について考えてみたい。

(2) 土 器

前提として、埋葬遺跡等の副葬品が現地生産されない希少財（威信財）を含む可能性があるのに対し、集落遺跡で出土する土器の場合、祭祀等の特殊な用途を除いては、原則として日常生活で用いられた「消費財」と考えられることである。ここでは三根遺跡を中心とした集落遺跡における土器の組成や産地、埋葬遺跡出土土器との比較等について考察を加える。

三根地区の集落遺跡の一つである三根遺跡（6～7区）の出土土器について、Ⅰ～Ⅴ期（縄文晩期・弥生時代～古墳時代併行）の資料を3段階にまとめ、土器系統を列島系・半島系（朝鮮半島南部）・楽浪（朝鮮半島北部）のカテゴリーに分類しつつ集計を行った結果、各段階で土器の3割以上、多くは7割以上が朝鮮半島系土器で構成されている事実が判明している（俵 2008）（図 16）⁽⁷⁾。

その一方で、三根遺跡のⅡ～Ⅳ期（弥生中期・後期併行）の土器に関する胎土分析の結

“越境”する文化

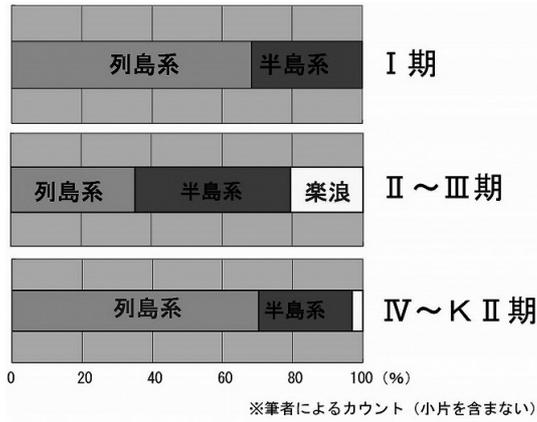


図 16 三根遺跡 6~7 区土器の組成 (表 2008 : 図 8)

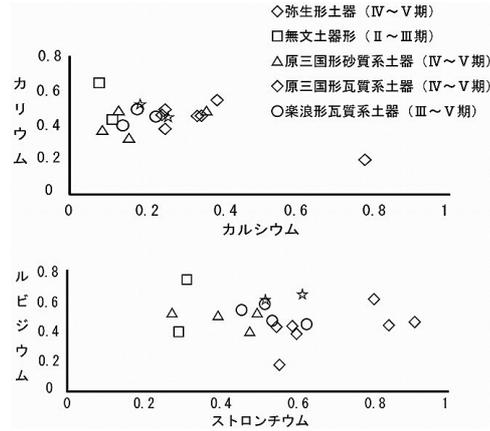


図 17 三根遺跡出土土器の胎土分析 (鐘ヶ江 2007 : 図 120)

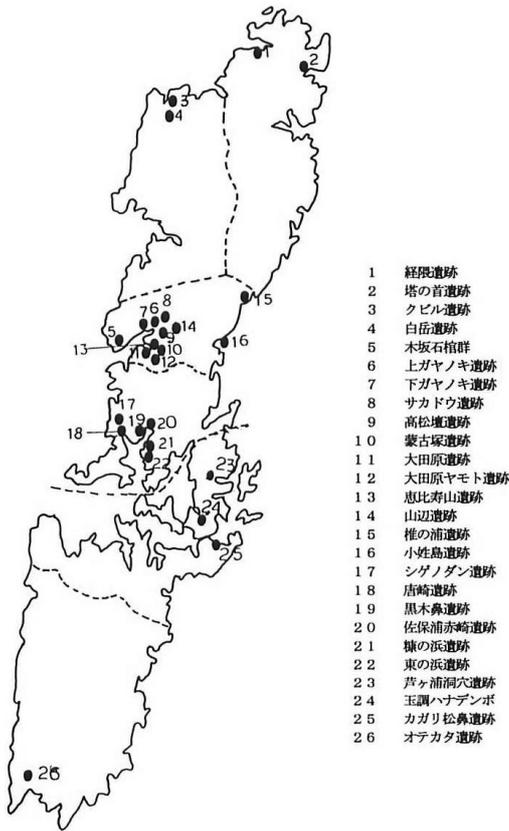


図 18-1 弥生中期後半~後期前半の遺跡 (阿比留 2001 : 9 頁図)

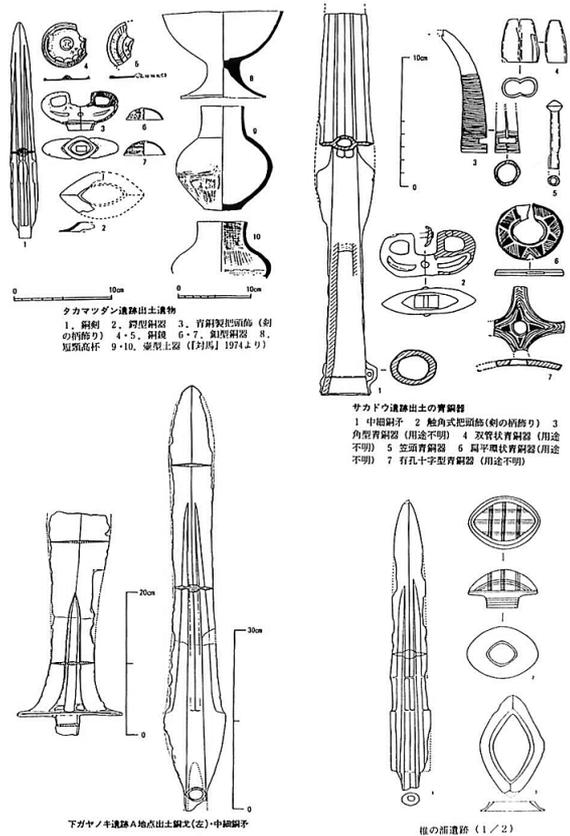


図 18-2 弥生時代の埋葬遺跡副葬品 (阿比留 2001 : 14 頁図)

果からは、日本列島系、朝鮮半島系の各器種を問わず、土器の多くが現地生産された可能性が示唆されている (鐘ヶ江 2007) (図 17)⁸⁾。

三根遺跡から得られた以上二つの事実は、集落遺跡ばかりでなく、埋葬遺跡の資料も含めた対馬の土器の性格を考える上で重要な鍵となる。

まず、三根地区の埋葬遺跡には、日本列島系・朝鮮半島系の「外来系遺物」（青銅器、鉄器、玉類、土器等）がきわめて高い比率で副葬されていることが知られており、この傾向は三根地区ばかりでなく対馬全島の埋葬遺跡において基本的に変わらない（図 18：阿比留 2001）。ただし、非日常的な意味を持つ埋葬行為において、埋葬施設や副葬品等に性差や階層差、あるいは葬送観念の違い等の様々なバイアスが加わる場合があることも確かである。しかし、もしも集落遺跡／埋葬遺跡の土器がすべて現地生産であったとすれば、特定の土器型式を選ぶ理由は、物品の希少性よりもむしろ使用者／埋葬者の社会的慣習の問題であり、集落・埋葬の間の差異を器種組成によって確認しておく必要がある。

I～V期の埋葬遺跡から出土する副葬土器の基本的器種は、高坏・甕・壺・小壺・碗・深鉢・鉢・短頸壺等がある（図 10 参照）。一方、集落遺跡出土の土器の場合、甕・壺・小壺・鉢が基本であり、甕の出土量が圧倒的に多いことが特徴ではあるが、組成には朝鮮半島系の瓦質系土器（深鉢・鉢・短頸壺等）も含まれ、埋葬遺跡の土器組成との共通性が注目される（図 6 参照）。逆に、埋葬遺跡の基本器種である袋状口縁壺（複合口縁壺）・高坏等の器種は少なく、特に弥生土器に典型的な赤く丹塗りを施した甕・壺・高坏・器台等の「弥生形精製器種」は含まれていない。

以上のことから、対馬の集落遺跡と埋葬遺跡の土器器種の違いは、各器種の量的比率や弥生形精製器種の有無を除いては少なく、朝鮮半島系土器に関してはむしろ共有されていたことが判明する。これは先述の胎土分析の結果において、従来搬入品と考えられていた朝鮮半島系土器に関する現地生産の可能性とも矛盾するものではない。さらにこの結果からは、非日常的な意味を賦与されていたのは、朝鮮半島系土器の方ではなく、日本列島系土器の方であったという解釈が成り立つであろう。しかし、弥生形精製器種は、九州本土においても供献土器として特殊な性格を持つものであり、そうした「特殊」な行為の実践が部分的に埋葬遺跡／祭祀遺跡に現れたと考えることもできる⁽⁹⁾。

この背景として、この時期に九州方面から大量に運ばれている中広・広形銅矛等の「国産武器形祭器」の存在があることは確かであろう⁽¹⁰⁾。これら国産武器形祭器の一群は、対馬各地の神社の宝物や伝世品として数多く知られているほか、当該時期の遺跡が集中する三根湾岸一帯において、埋葬遺構の副葬品として大陸系青銅器とともに中広銅矛等が出土する例も少なくない。また、三根ガヤノキ遺跡では、埋納遺構からの広形銅戈の出土も報告されている（阿比留 2001：図 18 参照）。

またこうした現象から、吉田広氏の言うように、「対馬海人が倭人であることの意味表明、さらには北部九州圏あるいは金印国家群と言われる地域集団への帰属意識、それよりも個人的単位を強く残したままの帰属意識の表明」（吉田 2001）という解釈も読み取れよう。ただし、例えば、アイデンティティ形成において獲得される様々な知的資源を理解するためには、日常生活の中での価値体系（実践的知識）についても検討しなければならない。詳細は別稿にて論じたい。

(3) 鉄器

最後に、三根遺跡山辺区における鉄器生産の意義について述べておきたい。

三根遺跡では、居住関連遺構以外の重要な発見として、遺跡・遺構の内外から出土している大量の鉄器及び「鉄器関連遺物」の存在があげられる。鉄器関連遺物とは、完成品（完形品）としての鉄器そのものではなく、鉄器生産及び流通のプロセスの中で生じる未成品、廃材、素材、屑鉄、各種道具等の様々な遺物を併せた呼称である（表3）。三根遺跡から出土する遺物をこのプロセスに従って区分すると、③精錬滓／④鍛造滓、鍛冶工具（鉄鑿・石鎚等）、砥石、鉄素材、鉄器未成品（⑤⑥の鉄素材・鉄挺等含む）、⑧⑨⑩に関する磨耗・破損品や屑鉄等が含まれている。すなわち三根遺跡では、①原料採取及び②製鉄（製錬）以外のすべてのプロセスを現地で行っていたことがわかる。

鉄器生産が行われた具体的な時期について、公表資料では弥生時代～古墳時代併行期の資料が提示されているものの、出土状況等の詳細な情報はない。ただし、出土している鉄器及び鉄器関連遺物には、国内の弥生時代の集落遺跡（壱岐原の辻遺跡・カラカミ遺跡等）ばかりでなく、同時期の朝鮮半島の資料にも類例が認められる（図19）。したがって、三根遺跡において、個別の遺構に絡む年代はともかく、弥生時代併行期（中・後期）に鉄器生産（鍛造鍛冶）が行われ、また、古墳時代併行期も引き続き鉄器生産が行われていたことは確かであろう。

以上のことから、三根遺跡集落の目的・機能として、単なる居住活動だけではなく、鉄器生産及び流通を含めた様々な活動等が含まれていた可能性が推測される。それは農耕・居住適地の少ない対馬において、日本本土と変わらない段階からの生産力、生産手段の確

表3 鉄器生産及び流通の主なプロセス（依2008：表4）

プロセス	具体的な内容	関連遺物
① 原料採取	鉄原料の採取，燃料の生産	鉄鉱石 木炭 各種工具
② 製鉄（製錬）	製鉄炉で原料を溶融させ粗鉄を生産する	鉄滓（製錬滓） 粗鉄 炉壁 鞆羽口 炭化物など
③ 精錬鍛冶	精錬炉で粗鉄を溶融させ不純物を取り除く（屑鉄を溶融したり，炭素量を調節もする）	鉄滓（精錬滓） 精錬鉄 鉄屑 鞆羽口 炭化物など
④ 鍛造鍛冶	鍛造炉で精錬鉄を熱し鍛打成形する（鑄造の場合③から鑄型に流し込み成型） A 鉄素材に加工 B 鉄器に加工	鉄滓（鍛造滓） 屑鉄 鞆羽口 鍛冶工具 砥石 鉄素材 鉄器未成品など
⑤ 保管	鉄器，鉄素材を特定の場所に保管する	鉄器 鉄素材（鉄挺など）
⑥ 流通	鉄器，鉄素材を流通させる（交換・交易）	鉄器 鉄素材（鉄挺など）
⑦ 使用	鉄器を実用目的に使用する（副葬・祭祀に供する場合を除く）	鉄器（完形品）
⑧ 再加工	磨耗・破損品を修理・再加工する（④へ）	再加工・転用品など
⑨ 廃棄	鉄器を廃棄する	磨耗・破損品 屑鉄
⑩ 再利用	廃品を回収・リサイクルする（③④⑤へ）	磨耗・破損品 屑鉄

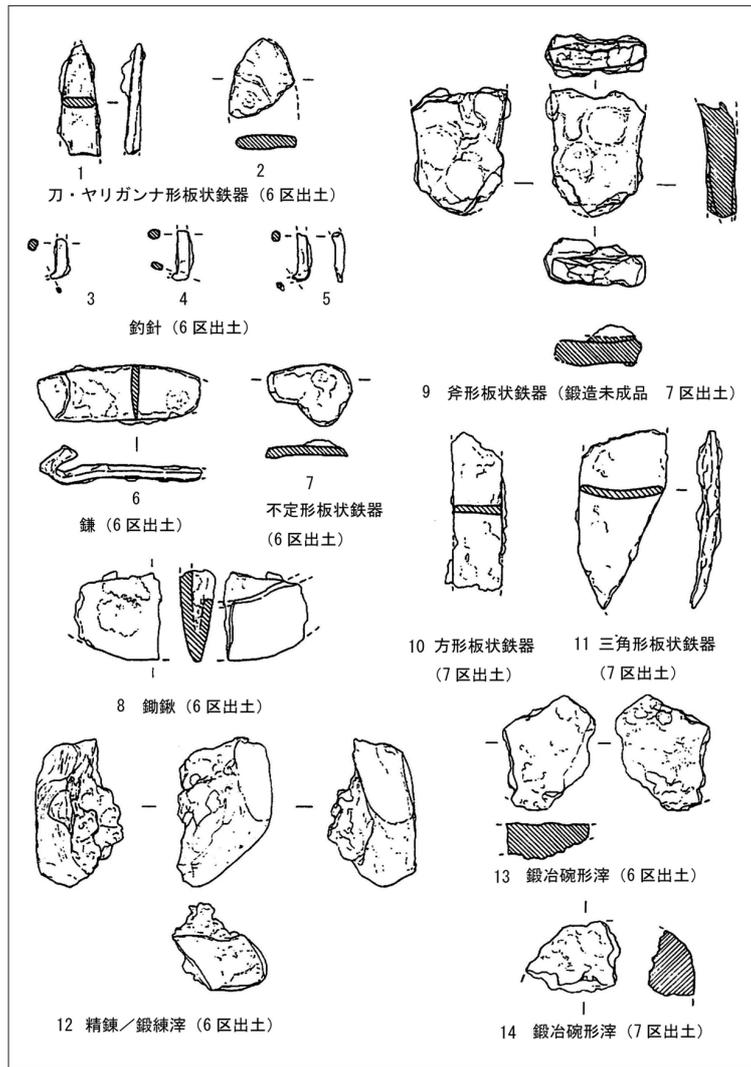


図 19 三根遺跡出土の鉄器・鉄器関連遺物 (峰町教育委員会 2002 所収図より作成)

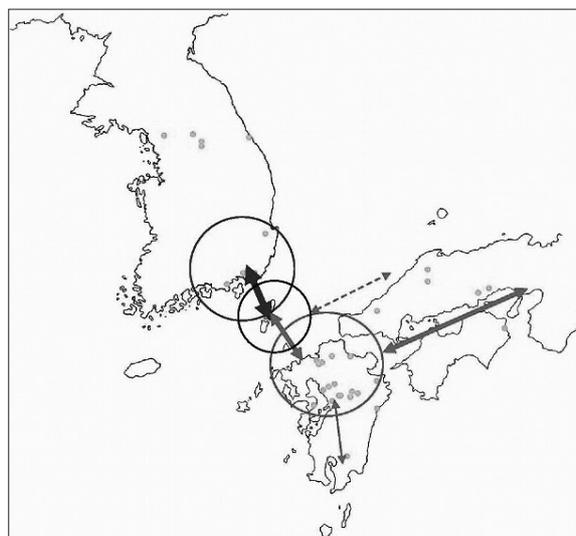


図 20 弥生時代の鉄器流通モデル (俵 2008 : 図 9)

保や自立性の高い経済活動が可能であったことを示している。その背景として、対馬海峡島嶼部を介するアジア大陸・朝鮮半島と日本列島各地との間での資源をめぐる流通／交易活動の存在が考えられる（図 20）。さらに、対馬における縄文晩期から弥生時代にかけての社会システムもまた、内的には様々な環境に適応した資源獲得の方法や知識、外的には縄文時代以来の広範な社会的ネットワークの存在により支えられていたはずであり、既存の社会システム、すなわち対馬の縄文文化的な社会システムから新たな段階、すなわち『後漢書』『魏志倭人伝』等に記されたクニ（対馬国）へと飛躍させる原動力の一つとして、対馬における鉄器生産の意義を捉えておきたい。

おわりに

本稿では、対馬三根地区の集落遺跡や出土資料から、対馬海峡島嶼部の縄文時代から弥生時代にかけての様相について検討を行った。本稿で対馬の先史集落を論じるにあたり、独特の環境（地理的条件、社会的ネットワーク）を考える必要性に触れ、集落出土の土器と埋葬遺跡の土器、そして対馬の鉄器生産の意義についても考察した。集落出土の土器は、原則として日常生活で用いられたものであり、産地分析については今後も検討の余地があるとしても、出土量の過半数を占める A 類土器が日本列島系、朝鮮半島系を問わず在地生産を基本とするという傾向は変わらないと思う。今後製作者や製作技術等の問題と絡めながら、他地域（韓国・九州・壱岐等）との比較検討を進め、対馬海峡島嶼部における地域間交渉の実態について検討したい。また社会システムや社会進化のモデルについて、東南アジアやオセアニア等世界の事例とも比較しながら「交流」のモデルについて検討していきたい。本稿が以上のような可能性を開く基礎となれば幸いである。

注

- (1) 宗氏は、12世紀頃に九州の三州二島の守護を兼ねた太宰小貳（武藤資頼）の被官として入島した惟宗（宗資国）の一族といわれる（別伝有り）。小貳氏の守護代（地頭代）を兼ねて武士化し、在地勢力の阿比留氏を抑えて次第に対馬の実権を握るようになった。豊臣秀吉の朝鮮出兵の後、一時李朝との通交も途絶えたが、江戸時代には国交を回復させ、江戸幕府より対朝外交を一任された（厳原町誌編集委員会編 1997：467-1953 等参照）。
- (2) 時期を同じくして対馬南部厳原町所在のオテカタ遺跡でも弥生時代併行期の住居址遺構が検出されている。
- (3) こざとへんに采のつくりの対馬独自の漢字表記である。
- (4) 「峰町日韓共同遺跡発掘交流事業（平成 14 年度長崎県日韓交流事業）」は 7 月 14 日から 22 日にかけて実施され、同期間中の 7 月 20 日にシンポジウム（峰町文化講演会）「対馬と韓国～弥生・中世～」を開催している（峰町教育委員会編 2003 参照）。
- (5) 近年 AMS 年代測定法をめぐる議論が行われているが、詳細は別の機会に論じる。
- (6) 夜臼式は刻目突帯文（突帯文）を有する甕に特徴がある。
- (7) 対象資料の多くは破片であり、小片を除いても総数は 2,000 点以上と推計される。この中から実際にサンプリングできたのは 899 点に過ぎず、特に資料中多くを占める酸化焰焼成土器（A 類）の胴部・底部破片等は、属性の判別、個体識別が困難な場合が少なくない。このため集計作業では、

“越境”する文化

できるだけ多くの有効標本を抽出するため、各時期を3段階にまとめて行った。時期別の数量では、I期65点(7.2%)、II~III期630点(70%)、IV~KII期204点(22%)である。

- (8) 蛍光X線分析の結果、得られたデータのうち、地域差をよく反映すると考えられるK(カリウム)とCa(カルシウム)、Rb(ルビジウム)とSr(ストロンチウム)の四元素を用いた散布図。弥生形土器は、散布図の右側に位置するが、無文形土器や原三国形土器A類(軟質土器)は散布図の左側に位置しており、用いられた粘土が両者で異なるという結果となっている。ただし両者の違いは大きくなく、朝鮮半島系土器I、すなわち無文土器形土器を搬入品とは断定できない。また、原三国形土器B類(瓦質土器)や楽浪形土器の数値は、両者の中間に位置しており、他の元素からも大きな違いは認められない。
- (9) 吉田地区では、恵比寿山遺跡では弥生中期の丹塗土器を供献した祭祀遺構も見つかっている。
- (10) 弥生時代の日本列島(九州)では、前紀末頃(対馬I期)に製品として青銅器が輸入され始め、すぐに鑄造生産も始まった。弥生中期(II・III期)以降はその需要も増え、弥生後期(IV・V期)には、祭器として巨大化した武器形青銅器や銅鐸等が大量に生産された。ただし、当時は列島内に銅鉱石の採掘場所や製錬技術は知られていなかったため、大陸・朝鮮半島方面から輸入した原料ないし不要品を鑄つぶすほかはない。なお、対馬における広形銅矛の機能については、朝鮮半島と九州とを行き来していた人々(対馬人/九州人)が、航海安全のお祭りのために運び埋納したという説が有力である。もちろん、対馬主体の祭祀を否定するものでもない。

参考文献

1. 阿比留伴次「対馬の弥生文化」、『第49回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の交易——モノの動きとその担い手—— 発表要旨集』、埋蔵文化財研究会、2001年、pp.1-19
2. 厳原町誌編集委員会編『厳原町誌』、厳原町、1997年
3. 小川英文編『交流の考古学』(岩崎卓也監修『現代の考古学』5)、朝倉書店、2002年
4. 小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学 弥生時代編』、六興出版、1991年
5. 片岡宏二「海峡を往来する人と土器——壱岐原の辻遺跡出土の擬朝鮮系無文土器」、山中英彦先生退職記念論文集「勾玉」、2001年、pp.69-82
6. 鐘ヶ江賢二『胎土分析からみた九州弥生土器文化の研究』、九州大学出版会、2007年
7. 九学会連合対馬共同調査会編『対馬の自然と文化』(総合研究報告No.2)、古今書院、1954年
8. 甲本眞之「環日本海の先史漁撈文化とヒト」、『シンポジウム 海峡を越えて 原之辻以前の先史時代の人と交流』、龍田考古学会、2001年、pp.31-34
9. 坂田邦洋『対馬の遺跡』(長崎県文化財調査報告書第20集)、長崎県教育委員会、1975年
10. 坂田邦洋『対馬の考古学』、縄文文化研究会、1976年
11. 白井克也「勒島貿易と原の辻貿易——粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易——」、『第49回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の交易——モノの動きとその担い手—— 発表要旨集』、埋蔵文化財研究会、2001年、pp.157-176
12. 高久健二「楽浪郡と弁・辰韓の墓制——副葬品の組成と配置の分析を中心に」、『考古学から見た弁・辰と倭』、九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学大会資料集、東亜大学校(釜山)、2000年、pp.25-57
13. 武末純一「弥生土器と無文土器・三韓土器——併行関係を中心に——」、『三佛金元龍教授停年退任記念論叢——考古学篇』、一志社(ソウル)、1987年
14. 田中良之「縄紋土器と弥生土器 1. 西日本」、『弥生文化の研究』3、雄山閣、1986年、pp.115-125
15. 俵寛司『境界の考古学 対馬を掘ればアジアが見える』、風響社、2008年
16. 東亜考古学会(水野清一・樋口隆康・岡崎敬)『対馬 玄海における絶島、対馬の考古学的調査』(東方考古学叢刊乙種第6冊)、東亜考古学会、1953年
17. 長崎県教育委員会(九州大学文学部考古学研究室編)『対馬——浅茅湾とその周辺の考古学的調査——』(長崎県文化財調査報告書第17集)、長崎県教育委員会、1974年

“越境”する文化

18. 長崎県教育委員会（九州大学文学部考古学研究室編）『長崎県遺跡地図——対馬地区——』，1995年
19. 日本文科学会『人文』第1巻第1号（特集 対馬調査），有斐閣，1951年
20. 日本考古学協会『登呂・前篇』，毎日新聞社，1949年
21. 日本考古学協会『登呂・後篇』，毎日新聞社，1954年
22. 日本考古学協会『日本農耕文化の生成 第2刷図録編』，東京堂出版，1960年
23. 日本考古学協会『日本農耕文化の生成 第1冊本文編』，東京堂出版，1961年
24. 釜山大学校博物館『勒島住居址』（釜山大学校博物館遺跡調査報告第13輯），1989年
25. 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」，日本考古学協会編，『日本農耕文化の生成 第1冊本文編』，東京堂出版，1961年，pp.37-77
26. 峰町誌編集委員会編『峰町誌』，1993年
27. 峰町教育委員会編『恵比須山遺跡発掘調査報告』，1974年
28. 峰町教育委員会編『トウトゴ山墳墓群調査報告』，1975年
29. 峰町教育委員会編『大田原丘遺跡』，1980年
30. 峰町教育委員会編『井出遺跡調査概要』，1990年
31. 峰町教育委員会編『大田原ヤモト遺跡』，1993年
32. 峰町教育委員会編『峰町の遺跡——三根湾岸の遺跡——』，1995年
33. 峰町教育委員会編『下ガヤノキ遺跡』，1998年
34. 峰町教育委員会編『日韓共同遺跡発掘交流事業記録集』，2002年
35. 峰町教育委員会編「長崎県峰町三根・吉田遺跡群の調査——海峡における弥生・古墳時代の拠点的集落——」『平成15年度九州史学会・九州考古学会合同大会要旨集』（同配布資料），九州大学，2003年12月
36. 家根祥多「朝鮮無文土器から弥生土器へ」，『立命館大学考古論集』I，立命館大学考古学論集刊行会，1997年，pp.39-63
37. 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」，『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』，1980年，pp.117-192
38. 吉田広「対馬海人の剣」，『九州考古学』75，2001年，pp.171-194

Crossed ‘border’ culture:
the archaeological situation from the Jomon to Yayoi periods
in the islands between Japan and Korea

Kanji Tawara

This paper examines the archaeological situation in the ‘border’ area between Japan and Korea from about the 1st millennium B. C. to the 3rd century A. D, based on materials from Mine sites located in Mine town in the northwestern area of Tsushima city, Nagasaki prefecture, Japan. The earliest finding from the Mine site contains Korean style pottery (Mumun pottery). The nearby Ide site is similar; the lower strata contains both Japanese Jomon pottery and Korean Mumun pottery. This “co-existence” situation existed continuously in both sites after the Yayoi period. Therefore, the above archaeological situation indicates not only the lifestyle of the people on Tsushima Island from the final Jomon period to the early Yayoi period, but also the social “interaction” through the Tsushima strait as the ‘border’ area.

Keywords: Jomon and Yayoi Periods, Tsushima Island, Korean Peninsula, Pottery, Settlement sites